

一席 沖縄県知事賞

1号線、5号線、58号線

宇堅 ترامクー

第一章 ロサンゼルス空港へ

「こんにちは」

日本語？

俺は目の前の時刻表から声の方向へ視線を移した——
トヨタレクサスが縁石えんせきに寄っている。

「すみません、おたずねします」

老婦人がドアを開けて降り、車の後部を回って俺に近寄ってきた。

ここサンディエゴは東洋人が多い。だから旅先の俺がアメリカ人に道を訊かれて不思議は無いが、わざわざ日本語で訊くだろうか？

「ぶしつけですけども……あなた様は日本人でいらっしやいますよね？」

サンディエゴのコンボイ通りなら日本語を耳にする機会が多い。日本食を扱う店がいくつもあるからだ。だが今、俺が立っているのはそこから車で十五分、高級住宅地の集合店舗で、目の前に居るのは総白髪の婦人、一〇〇%の白人だ。

「そうです」

「どちらまでおいでになるのですか？」

「ソレント・ヴァレーまでです」

老婦人は人さし指を立ててこう返した。

「そこから海岸沿い電車コウススタでロサンゼルスまでいらつしやるのですね？」

「そうです」

「ああ、やつぱり！ でしたら旅の御方おかたとお見受けしてお頼みしたい事が
ございます」

確かにリュック担かついで帰国の途とだが「旅の御方おかた」なんてまるで時代劇の
セリフだ。

「……その『お頼み』によりけりですが」

ロサンゼルス「LAまで一緒していただけませんか？」

日本語で話しかけてくる外国人は九割方がた、悪人というのが俺の経験だ
……婦人は俺の眼の中の迷いを見て取ったか、すぐに続けた。

「ご存じないかも知れませんがこの時間帯は一人だと渋滞じゅうたいが酷ひどうございま
して、」

「カープール?」

「そうです!」

道路補修^{ほしめう}、雨、風、事故……サンデイエゴからロサンゼルスまで四時間ではきかない。業を煮やした州はいかなる渋滞^{じゅうたい}時にも二時間強で移動できるようにした。

それがカープールだ。運転手以外に同乗者が居れば専用レーンを使える。余り快適なので助手席にマネキンを載^のせた横着^{おうちやくもの}者がハイウェイパトロールに逮捕^{たいほ}された事さえある。

俺の乗り込んだレクサスは805号線から5号線へ合流した。後はひたすら北上するだけの長い長い道中になる。

「キャロルと申します。以後お見知りおきを」

お見知りおき、と来やがった。拙者せつしやは、と切り出したいのを堪こらえて大人おとなしく名乗った。

「幸喜と申します」

「コウキさん、ロサンゼルスはどちらまでいらっしやるのかしら？」

米人は名前で呼びたがるが「さん」付けは姓か名か不明な時に便利なんだろう。

「ロサンゼルス空港です」

「わたくしは日系博物館までですが、先にあなた様をお送りいたしましう」

日系？

思わず前方、カールズ・バッドの湖から太平洋側へ視線を移した——白人の老女らしく七面鳥のような喉のどの弛たるみが震ふるえている。

「すると、あなたは日本人でいらっしやる！ そのキム・ノヴァクばりの

プラチナ・ブロンドと緑色の瞳で、てつきり……」

「ハハハ！ 夫が日系二世でしたの。それで日系博物館のボランティアという次第です」

「ところで……」5号線に入って数分、とうとうキャロルは切り出した。「立ち入ったことをお訊き、」

「どうして日系アメリカ人でもない私が青年みたいな格好かっこうをしてサンデイエゴを徘徊はいかいしているか、ですな？」

「そうです」

「話せば長いですよ」

「長くてもLAまでには終わりますでしょ？」

俺は窓ガラスの向こう、太平洋を指した。

「沖縄という島をご存じですか？」

「エエツッ！」

それまでチラチラと横目使いだったキャロルだが完全に顔をこちらへ向けた——ロボコップみたいな婆さんだ。

「まあ、まあ、まあ、袖振り合うも、と言いますが本当に何かの縁えんですねエ」

「沖繩えんに縁えんがあたりで？」

「あるものにも、あなた、舅しゅうと姑しゅうとめはオキナワ出身でしたの」

「そうなんですか。狭い世間ですな。ならそれほど長くはならないかもしれませんかね」

さてどこから話そうか……

第二章 アメリカ合衆国へ

妻がこの世から去って三年経った。東京の子供たちから年賀状以外の

沙汰さたは無い。

合名会社ごうめいの持ち分を売って早期引退を決めた。足腰が立つうちに東南アジアを再訪しよう……俺はもう読まないと分かっている本、不必要なPC機器えを選び分け始めた。

作業開始十数分、押し入れの奥から「母」と書かれた段ボール箱が出て来た。

——忘れていたな……

俺は高校卒業直前に養母を亡くした。

養母は児童養護施設の所長をしていた。

その日は養母の顔を見ずに登校した。彼女はたびたび夜遊びから職場へ直行した。

——また所長室で轟沈してるんだろう……

我が家と職場の所長室との間には変葉木クロトンの垣根があるだけなのだ。

夕方、刑事二人がやってきて身元確認に同行してくれ、と告げた時に初めて「こりゃまずいことになった……」と直感した。

俺は不良たちと付き合いがあったので警察のやり方を知っていた。彼らはなまじつかな事件では被害者の自宅までは来ない。

とりあえず着替えを口実に彼らを玄関前で待たせ、養母の寝室に入ってたんす箆筒を開けた。

折り畳んだ服が幾重いくえもの層になっている。その地層の隙間すきまには——養母は隠しているつもりだが——「子供にとってはとてもとても危険な物ブツ」がアンモナイト化石のように眠っている。それを段ボール箱に収めた。

箱にはまだ余裕がある——机の引き出しを丸ごと抜き出して雑多な書類や通帳、印鑑類を一気に流し込む。

窓を開け、音を殺して箱をクロトンと施設の壁との露地に降ろした。

そこはもう孤児院の敷地内だ。

——俺の留守中の家宅^{ガサ入れ}搜索は無いだろうが念のためだ。後で安全な場所に移そう……

モルグ
安置所で遺体^{いたい}の確認を終えて帰った。

施設の隣近所が寝静まるのを待ち、垣根を越えて段ボール箱を抱え上げ、施設内の倉庫へ入り込み適当な隠し場所を探した。

戦後すぐにできた建物だから増改築を重ねている。隠し場所には困らなかった。

施設長である養母と個人的に結びつく場所しか警察は手を入れないと分かっていた。

その後の数週の記憶は曖昧^{あいまい}だ。それほど忙しかったのだ。米軍支配下だ

からパスポートやビザを揃えなければならぬ。沖縄は日本ではないのだから不思議は無いが。

遺体の返却は検視解剖の終了待ちだから葬式は遅れに遅れる。本土への出航日に間に合うか不安だったがどうにか事無きを得た。

孤児院というのは身寄りの無い者の冠婚葬祭に慣れている関係者が多いので手続きは予想したより楽だったのだ。

形だけの喪主として無表情で弔問客に頭を下げているうちに葬儀も終わった。

次にこの段ボール箱を思いだしたのは日本本土への出発当日だった。

——帰省した時に始末すればいい……

俺は米軍放出品のでっかい背嚢を担いで玄関に錠を鎖した。滅多に気温が十度を割らない南国なのに少し肌寒かった。

あれから四十何年、その段ボール箱の中身をいちどきに畳の上にあけると一葉の写真が目についた。

自転車のハンドルに手を掛^かけてこちらへ微笑みかけている女。

背景の四つ辻の一角には食堂らしき看板が見える

ルート66・ダイナー「フィリップス」

写真の裏にはこう書かれている。

「やっと着きました。連絡はこれで最後にします。あの子を宜^{よろ}しくお願いします。アケミ」

この達筆なアケミは俺の実母だろうか？

酔った養母が「メキシコに行った」と口を滑^{すべ}らせたことはあるが……ルー

ト66は名高い北米横断道路だ。メキシコではあり得ない。

「ちよつと待つてくたさい、コウキさん。写真を送ったのが仮にあなたのお母様なら、亡くなった方はどなたのお母様なのですか？」

「ああ、失礼。他人と話す時にいちいち養母とは言わない習慣ですから混乱させてしまいました——死んだのは養母です。沖縄戦でどっさり生み出された孤児を集めた施設の責任者で、彼女は私を選んで養子にしました。酔った時に一度『あなたのおつかあはあたしの知り合いだった』と呟いたんですが、醒めた時にはトボけてました。以後、互いに実母の話は避けたので確かな事は何も……」

殺されたとは敢えて言わなかった。わざわざ物騒な話題を提供する必要もあるまい。

その写真の女にはどこか見覚えがあった。

昔、沖縄に居た米兵たちは、こういう厚化粧の娘、短い髪にパーマをか

けて唇の粘膜ねんまくをまるつきり無視して勝手な境界線を設定し、その領域全体に真っ赤な口紅くちびるで重厚じゅうこうに塗装とそうを施ほどこした沖繩娘おきなを好んだ。米兵たちはポパイのような刺青いれずみ入りの上腕筋じょうわんきんに沖繩娘を「ぶら下げて」闊歩かつぽしていたものだ。アケミの名は知らなかったが養母のアルバムで何度か見かけた憶えがある。養母の仲間の一人だったのだろう……

天願テンガン幸喜。

不意にその名が眼を射た——俺の名義の郵便貯金通帳が写真かたわの傍らかたわにある。

……変だ……

その一、養母は預金貯金というタイプにはほど遠かった。金回りの良い時にはダンスホールへ通い、帰りはたいてい酔っぱらっていた。現に彼女名義の通帳はどこにも無い。

ましてや養子名義の通帳を作るような女タマではなかった。

その二、通帳の数字を追うと、年に一度、三百ドル₳が振り込まれている。最初に振り込まれた年を除けば、振り込みの日付は八月七日、八日、九日に集中している。八月八日なら俺の誕生日だ。女なら八重子と名付けるのが普通だが。

そしてこれも判で押したように、その翌月末までには、つまりたったひとつきひとつき一月で、残額は一桁ひとけたの単位に減っていた——これは俺の誕生日ごとに振り込まれた金を養母が引き出していた証拠と考えていいだろう。

その三、それまでの慣例かんれいを破って最後の振り込みはその年の二月、いつもより半年も早く、額もいきなり五百ドルに増えている。

その四、通帳裏表紙の見返りに色褪あせた新聞紙が挟まれていた——縦も横も切り口が直線だからハサミを使って丁寧に切り取ったことが分かる。

その切り抜きの真ん中に楕円形の顔写真があった。韓国の朴槿恵パク・クネ大統領や台湾の蔡英文ツァイ・インウエン総統を思わせる腫れぼったい目をしている……アケミに

似ているようでもあるが別人にも見える。

まるで女医然ぜん、学者然ぜんとして、化粧つ気無し。イヤリング、ネックレスさえ身につけてない。女らしさを売っていは仕事にならない、あるいは売り物にしなくても仕事はできる環境かんきょうに居るのだろう。

——最初のアケミが俺の母親でその厚化粧を落としたらこの顔になるのだろうか？

どちらにしても何の目的で養母はこの新聞記事の顔写真を挟はさんでいたのか？

「キャロルさん、ラ・ホーヤのバス停でよく私に声をかける気になりましたね」

「それはまたどうしてお訊ききになるのですか」

「初対面ひつたいめんの人様には敬遠けいえんされる面つらなんですよ。東洋人にしては凶悪きょうあくな人相

だと思いませんでしたか?」

「ちつとも。日本おくにではどうか存じませんが米連邦捜査局FBIの出す最重要指名手配リストの写真をご覧らんになればご自分の顔かんばんせに対するその評価も変わりますよ」

「だといいんですがね。ともかく若い頃の写真を見ると自分でも余り近づきたくない顔なんです。他人は減多めったに話しかけてきませんでしたね……若い頃のその凶暴きようぼうな衝動しょうどうがいきなり戻ってきましてね」

「養母に実のお母様からの送金を使い込みをされたからですか?」

俺は日本人得意の技を使った——つまり曖昧あいまいにうなずいた。

「ええ……いや、金額もさることながら……養子縁組ようしえんぐみを解消する、と卒業前に言い渡されていましてね」

「高校卒業したら家から出なさい」

養母は言った。俺が高校三年生の時だ。俺は憤然ふんぜんとした。そうまで邪険にされるほど悪い養子だとは思ってなかったからだ。後に判明したのだが施設に新しく入ってきた白人米兵との混血児の成績が俺以上に良く、俺にとつて不幸なことに、そのガキは歌う天使・ウイーン少年合唱団員みたいな顔をしていた。

まさにその夜からだ、俺が琉球政府が奨学金を貸与たいうよする日本本土留学生選抜試験めざして勉強を始めたのは。

時間は無かった。養母の薄情はくじょうを嘆なげき悲しみ怒る暇など無かった。

留学生選抜試験はその年のうちに終わり正月明けに俺はラジオ放送で合格を知った。後は留学生全員で西鹿児島行きの船に乗り込むまで自由の身だ。

普通の生徒は卒業式まで他の生徒に合わせて登校するのが規則だが俺は

毎晩遊び歩いて学校へは行かなかつた。柄にもなく不良の真似事をしていたが、後に振り返ってみると養母が殺された日を挟んで数週間にすぎない。

ある意味では養母の酷薄こくはくさのおかげで大学へ行けたようなものだ。今の今まで、思い出すまい、水に流そう、と自らを宥なだめてきたのだが、あれから四十五年、俺の手に渡るべき金を使い込んでいたかもしれないという疑念ゲイシールが間欠泉ふのように噴き上がった。

「コウキのライバル、白哲はくせきの美少年出現というところですか？」

頃合いと見たか彼女は「さん」を抜いた。

「そうなんです。その子はまだ小学三年生でしたがサンセット大通りブルーバードを歩けばデイズニー映画からお呼びがかかったでしょうね。西洋人にあこがれる東洋女たちが『息子に持ちたい』と夢にまで見る美貌びぼうでした。混血児ハイフと告げられても信じられないような金髪碧眼へきがん、ホラ、メンデルの法則という

んですかね、混血児でも少し光彩の色が薄いだけで、低い鼻と短い脚を長い胴で補おぎなっている、まるつきり沖繩人のような混血児もいたし、鼻筋が通って腰から下は地面まで全部、脚という95%アメリカ人も何人か居ましたよ」

養母は俺の高校卒業を待って俺との養子縁組を解消してその混血美少年を家の中に引き入れる腹だったらしい。

事件はそれから七ヶ月後に起きた……

「こっちでも交通事故は多ございます」

「そうなんですか……」

迷った……結局、喋しゃべった。

「いや、殺されてしまったんです」

キャロルはさすが日系人とのつきあいに慣れた者らしく息を呑んだだけで黙っていた。

もし人生をやり直せたらどうするか、と問われたらこう答える。

「最初の人生と同じように周りの大人や教員たちに適当に扱われる運命なら勘弁かんべんしてくれ。このまま生きて死ぬ方がマシだ」

大学進学まで俺は——たいていの子供はそうだろうが——自分の人生をコントロール制御できなかつた。いつでも周りにつつき回され、尻を叩かれ、頭を小突つかれ、欲しくもない人参ニンジンの方向に鼻面を向けられて鞭打むちたれてきた。

養母の遺体いたいの確認を終えて俺はホツとした。

——これですべての過去、恥ずべき記憶から解放される……

以後、確かに楽にはなつた。

人を苦しめる過去の記憶というのは「もうおまえ以外にアノ事を知る者は地球上に誰一人として存在しないんだぜ？」と自分自身（じぶんじぶん）に（ひら）撮ける（じょうきよう）状況になればさほどの殺傷力（さつしやうりよく）を持たなくなるものだ。

ただ、なぜ養母が殺されたのか、そして貯金通帳の数字の謎、この二つだけは、台風一過、浜辺に打ち上げられた難破船（なんぱせん）の錆びた金具（さび）のように、時折、意識の表面に浮かび上がってはまた沈んだ。

養母殺害の現場が彼女の支配している施設内や自宅ではなく、特殊な「売春宿」なのも異様だった。

当時、沖縄の売春婦は五階級に分かれた。最高級から順に

- A 本土から来ている役人・観光客相手（ヤマトウンチュ）
- B 地元の沖縄人相手（ウチナンチュ）
- C 白人米兵相手（アメリカ）
- D 黒人米兵相手（クロンボー）

Z 貧乏人相手
ヒンスームン

このZ宿は廃屋の一番奥にある数部屋で、すべての電球が取り外されていた。理由はある。顔の部品が欠落けつらくしている、四肢ししの一部を失っている、視聴覚しちようかくが十全ではない、このどれか、あるいは二つ以上の組み合わせの女たちが暗闇の中で蠢うごめいているからだ。

宿Aのメンバーは、夫や地元の親兄弟にお仕事がバレては困る人妻、戦争で零落れいらくした元士族しぞくや華族かぞくの婦人で、この大リーグメジャーリーグの中でも高名な高級売春宿で養母は殺されていた。

変だ。

彼女が殺されるなら宿Cでなければならぬ。(養母は黒人を嫌っていた)

タクシー運転手の証言で容疑者Xの足取りは分かっていた。Xは那覇空港からまっすぐその殺害現場となった高級売春宿にタクシーを乗り付け、

その夜に養母と会い、明け方までには彼女を絞殺こうざつして昼過ぎには沖縄を離れていた。

手際の良さから考えて、養母と容疑者との間には事前には何らかの面識めんしきや連絡があつたはずだ、知らないか、と俺は刑事に聴かれた憶えがある。

「事件翌日にはマイクとカメラが私を取り囲んで養母殺害養子失踪事件しつそ、その翌日は一転、養子が下手人だよ全員集合、の大騒ぎですよ」

「養母殺しの犯人扱いされたのですか？」

「マスコミの常で遠回しに、だが実質的に、ね。『養母を殺して隠れていたんだらう』というわけです。こちらとしては演技する間も無くてある意味では有り難がたかつたんですが」

「演技？」

「一人残されて悲しみにうちひしがれる息子の凶ですよ」

「コウキ。肉親を失った喪失感そうしつかんはずっと後に押し寄せて来るんですよ。それはもう突然に」

人はそれぞれに心の闇を抱えている。

親の通夜に来た親戚の沈痛な面持ちを見ていると笑いが堪こらえきれない、外に出たら兄が来て二人でひたすら大笑い、とある漫画家がTVで語っていた。

俺の場合、それほど酷ひどくはない。ただ……何も感じないのだ。

養母に限らない。誰が死んでも悲しいと感じたことは一度も無い。精神分析ぶんせき医なら「愛の無い家庭に育ったのが原因」と断言するだろう。

そうかもしれない……分からない。

不思議に俺は孤児仲間には評判が良い。助ける時は本気で助ける。虐いじめられている仲間をかばうなら、加害者が諦あきらめるまで、影のように被害者に

付き添う。虐めに気づかないフリをしないし、その場しのぎ、中途半端に双方を叱って「さあ二人で、は〜い、握手」で終わりにすることは絶対に無い——俺に惻隱の情が皆無、というわけではないのだ。

だが……「気に食わない野郎は死ね」「死ねば終わり」どんな場合でもその気分から逃れることができない。

幼稚園以来、俺は心の中に長い長いブラックリストを持っていて、時折、新たに認定した敵の名前を追加しながら生きてきた。

愛の無い家庭に育ったのが原因？ 確かに俺自身、社会病質者との境界領域りょういに居るかもしれないという認識はある。だが両親揃った家に生まれ育っても同じではなかったかと俺自身は思っている。

「肉親を失った喪失感はずっと後に押し寄せてくる……そうかもしれないませんね……で、養母の死後悲しむ間も無く留学生全員、乙姫丸マーメイドという客船に

乗り込んで出港しました。それからですよ、キャロル、我が青春は。在学中は養母のことはすっかり忘れていました」

半年後、帰省したら捜査は実質的に終了していた。容疑者が逃げ帰った日本本土は結局のところ犯行時には法的に外国なのだから当然だろう。建前は警視庁が捜査を引きつぐとか何とか言うだろうが既に事件は琉球警察の手を離れていた。迷宮入りと見なしていい。

結論——寝ている箱は起こすな。

施設へ行って新しい所長に適当な話をして倉庫を開けて貰い、例の段ボール箱を家に運び、押し入れにしまい込み、ガランとした我が家に錠前を幾重にも鎖し大学に戻り……

それっきり忘れた。

「大学を卒業して島に戻って所帯を持って、大掃除のたびに棄てなきやと思っではいりましたが……とにかく箱の中身は四十五年ぶりに陽の目を見たわけです」

二人の女の写真、それと俺名義の貯金通帳、子供にとつての危険物……養母の私物を意図的に警察から遠ざけたことはもちろん話さない。キャロルのような善きクリスチャンに俺の無神論や「権力とはできるだけかわり合いになりたくない」という志向が解るわけもないだろう。

「ということでお話は最初のお母様らしき写真に戻るわけですね？」

「そうです。で、箱から出て来た貯金通帳の名義、そして一年一度の振り込みが決まって私の誕生日近辺だという事実、この二つで確信しました。その写真は間違いなく実母が送った物で、この食堂のある場所に彼女は確かに居たんだ、とね。さっそく写真から読み取れる情報を並べて検索しました。看板にある文字『ルート66、ダイナー、フィリップス』の三つです」

「ヒットしました？」

「それどころか多すぎて収拾がつかないほど。さらに1950年代を追加して再度検索してみました。やはり多すぎて手が付けられない。一計を案じて「ジャンパニーズ」や「オキナワン」を入れたら今度は見当外れのものばかり。削って「マイノリティ」と「メキシコ」を加えたら……」

「大当たり？」

「食堂はどこに在ったと思います？ ミズ・ワトソン」

「ラ・ホーヤ。あなたがたたずんでいたモールのある高級住宅地ですね」

「根拠は？」

「初歩の推理ですよ、ミスター・ホームズ、あなたが立っていたモールの南側はノーベル通り、そこから5号線に乗り入れて十五分も南へ下ればメキシコ国境に突き当たります。ですからサンディエゴのラ・ホーヤということになります」

「惜おしい。当たらずといえども近・から・ず」

「なら惜おしくもありませんね。どこでした？」

「ニュー・メキシコ州のシカモア」

キャロルは車の天井てんじょうを仰あおいで笑った。

「お母様はメキシコへ行つてしまわれた、というのはガセブルシットト
ですね」

「というよりも生涯しやうがい、島から一步も出ない人たちにとってはニューもオールドもメキシコに違いは無い、という感じでしょうね」

「あなたにとって幸運にも半世紀前の建物が残っていた、あるいはインターネットとんごうに投稿とうこうされるようないわれのあるルート66沿いの食堂ダイナーだった、そういうことですか？」

「どちらでもありませんね。十年ほど前に書かれた記事でリタイア組かいそうぎの
回想記かいそうぎでした。著者ちよしやがシカモアという地区からニューメキシコ大学に通つ

ていた頃の思い出を連載れんさいしてしましてね。その記事の中に、著者ちよしゃが下宿していた隣近所の食堂やドラッグストアの描写びようしやがいくつかあつて、そのうちの一つが『ルート66沿いのダイナー、フィリップス』でした。もしや、と思ったのは文中の『ここは白人の少ない地域ちいきで、住民の多くはヒスパニックや先住民の子孫だ』というくだりですね。ならば一見、ヒスパニックに見えないこともない沖縄人——ほら、南方系の我々は肌が本土人より浅黒いから——にもシカモアは居心地が良く、母は1950年代にその記事を書いた人の近所に住んでいたのではないかと希望わが湧いて来ましてね」

「それで何か手がかりになるような事が書かれていましたか？」

「未だに英語の長文は苦手です。私が読み違えてなければこんな話でした。『ナバホ族の集落しゅうらくを訪ねた時に興味ある発見をした。インディアンたすの住居に入り込んで話している東洋人たちの様子が白人に対する態度とはかなり違っていた』とありました。人種差別の話題ですから当然、不快で

ろこつ びようしゃ
露骨な描写は意図的に避けられていて、細かいニュアンスまでは読み取れなかつたんですが」

「どのような違っていたんですかね？」

「要約しますとこうです。『東洋人は白人と話す時に例外無く身構えるものだ。その緊張感きんちようかんは傍目はためにも分かるほどだが今、目の前に居る沖縄からの留学生たちは珍しく下手な英語をまくし立てながらハオ、ハオ、と一緒にきせる煙管でも吹かしそうなくらい寛くわんいでいる』有り体ありていに言ってしまったえば、東洋人はインディアン相手だと劣等感れつとうかんを感じないで済む、いや優越感ゆうえつかんさえ持てるのかもしれない、というところですかね……読んで私はこう考えたんですよ。1950年代にアケミの居たシカモアに住んでいて、しかも差別の問題に敏感な知識人女性が居た。その女子大生なら、はるばる地球を半周してやって来た沖縄女性にも関心を寄せたかもしれない、食堂ダイナーの行き帰りに自転車に乗ってすれ違うアケミを見かけたかも知れない。この写真を見

せれば憶おぼえているかも知れない……そう思うと、もう居ても立っても居られないというヤツですよ」

「その著者を追跡ついせきすればいいわけですね」

「署名しよめいはマリー・B・オズボーン。肩書きは『元・サンディエゴ郡立図書館の館長』とありました」

「公立図書館の館長までなさった方なら現住所を知るのは不可能ではありませんね」

「ええ。それでこのマリーさんに絞しぼって検索してみました。すると、キャロル、可能も何も、一瞬いつしゆんでしたよ」

「マリー・B・オズボーン」と「ニューメキシコ大学」で検索すると三件ヒットした。

その一、ニューメキシコ大学の公式サイトアーカイブ。これは部外者

も自由に閲覧えつらんできた。マリーは「カツパ・オミクロン・ファイ」という名前の女子学生友愛会ソッロリテイの、さらに小分けされたサークルの一員として名前だけが書かれていた。

その二、先に検索した、シカモアでニューメキシコ大学に通っていた頃の回想録かいそうろく。

その三、サンディエゴのラ・ホーヤからのバス路線沿いにある大規模老人集合住宅の入居者の一人。

「それでようやくサンディエゴ、ラ・ホーヤなんですネ」

「そういうことです」

「そのマリーさんはまだご健在でいらつしやいました？」

「ご健在すぎて会うのに一苦労でした。というのも、訪ねたら居ないんですよ。老人アパートの管理人に訊きいたら週に五日はカジノのバスに乗り込

「むんだそうです」

「夫を朝鮮やベトナムで亡くした未亡人にはかなりの金額が支給されるんですよ。子供たちも手が離れてクリスマスはなの時しか会いに来ないのでカジノ通いというお婆さんグランマはここでは珍しくありませんね」

「そうなんですか……翌日、出直してそのバスに乗り込みました。出発時刻五分前、運転手の横に立って観光バスのガイドよろしく自己紹介しました。で、マリー・オズボーンの名を口にした途端とたん『はいヒヤ』、私が立ってるすぐ横の車椅子の老婦人でした。このバスは車椅子ごと乗り込むんですね。驚いた事に、」

「コウキ、車椅子どころか、酸素ボンベやリンゲル液えきの装備そうび一式を牽引けんいんしてカジノに行く人も居ますよ。驚くには当たりません」

「いや、驚いたのは車椅子ごときに、ではなく肌の色に、です。マリー・B・オズボーンはアフリカン・アメリカンだったんです」

歩かないから肥ったのか肥りすぎで歩けなくなったか……特注の車椅子ではないかと思えるほど全身が膨れあがっている黒人の老女だった。

合衆国にはこういう漫画のキャラクターのような肥満体がざらにいる。ハリウッド映画なんかで見慣れてなければ男の俺でさえおびえてしまうような巨大な黒人女性……

「確かにアメリカ人といえは金髪碧眼きんぱつへきがんを連想するアジアの方々には意外かも知れませんが……アスターニツシユメントそれほどの驚きでしたか？」

「いやいや、キャロル、私はアメリカ様に統治とうちされていた沖縄の生まれですよ。コザなんて街は『白人街』と『黒人街』とに分かれていて、黒人を見ない日はありませんでした。皮膚の色なんかではなく……たとえは……この自由の国アメリカ合衆国でさえ読み書きできない黒人に無条件むじょうけんの

選挙権せんきょけんを認めて実質じつしつてき的に投票できるようにしたのは1970年代初頭しよとうですよね。ですから1950年代に黒人女性が公立のニューメキシコ大学に在籍ざいせきしているとは夢にも思いませぬよ。私が生まれたのは1952年です。1970年の出来事ならアメリカ合衆国の歴史ではなく私にとって現実そのものなんですから魂たましぬ脱だつぎますよ」

「ハハハハ、その『魂たましぬ脱だつぎる』という方言、宅たくのヒデオもよく口にしてましたよ」

「あんた誰？」

彼女が身構みがまえるのが分かった。驚きを隠せない俺の表情を見ての反射だろ。

車内はアメリカ的な空調の常で畜肉専用冷蔵庫みたいに冷えているにもかかわらず彼女の巨大グランドキャニオンな乳房の峡谷には汗が浮うき出ている。

「失礼しました。ほとんど諦めかけていたものですから」

まさか「黒人女とは思わなかった」とは言えない。

「あなたは六十年ほど昔、ニューメキシコ州のシカモアあたりからニューメキシコ大学へ通っていたマリー・B・オズボーンさんでいらっしやいますか？」

「いいえ、あたしは、『つい最近まで』ニューメキシコ州のシカモアあたりからニューメキシコ大学へ通っていたマリー・B・オズボーンさんでいらっしやるよ？」

還暦過ぎた沖繩ジジイが米国で本場英語の親父ギャグを黒人婆さんからぶちカマされるとは思わなかった。長生きはするもんだ。

「その『つい最近』ですが、この女性を見かけませんかでしたか？」

俺はアケミの写真を差し出し、どうせ訊かれると分かっていたので正直に続けた。

彼女は目を瞬かせながら写真をたつぷり十数秒間は見つめていたがやがて俺に視線を戻した。

「あんた、この女の『年の離れた弟』とでも言うつもり？」

「他人に訊かれた場合、彼女なら私をそのように紹介したかもしれません。私自身は彼女の息子だろうと信じて波路遙か太平洋を越えてここまでやって来ました」

「子供の話なんて聞いてないよ」

——嗚呼、この人だ！

だが返ってきたのは色よい返事ではなかった。

写真。

無表情でマリーが写真を突き返している。

「オズボーンさん。私は孤児院で育ちました。彼女には子供が居ると公言できない事情が有ったはずです。子供が居ると知れたら米軍将校に棄てら

れるとか、結婚して一緒に本^{ステイツ}国に渡れないとか……」

写真は差し出されたままだ。

「お願いします。彼女がシカモアでどうなったか、今現在、生きているか死んでいるか、せめてそれだけでも教えていただけませんか」

マリーは窓から加^{カリフォルニア}州の蒼空^{あお}を睨^{にら}み上げた。まるで合衆^{メリケン}国歌舞^{かぶ}伎^ぎの先代海老蔵^{えびぞう}だ。

「畜^{デーム}生。星占いじゃ、今日こそ絶^{ぜつて}対勝^ーてると出たのに……」

来訪者名簿^{らいほうしやめいぼ}に署名^{しよめい}し終えてから車椅子を彼女の部屋まで押した。

「訊^{シユート}いて」

「とりあえず、写真の女性をどのあたりで見かけたかですね」

「なんでまたそんな悠長^{ゆうちやう}なことを？」

「その界限かいわいから現在の彼女に辿たどり着きこうと考えています」

「……ミスタ・テンガン、あんたはフィリップ・マーロウにはなれそうもないね」

彼女は肩越しに親指で壁を指した。

「あそこの本棚、真ん中の段。一番右端にある本をとってくれる？」

俺は立ち上がって本棚の前まで行った。

「それ。マロンレッドイシユブラウン イマキユレイトホワイト海老茶と純白のツートンカラーになってるアルバム」

俺には色褪あせた茶色と薄汚れたネズミ色にしか見えなかったが近い色は他に無い。

その本に指を掛けようとして思いとどまった——下手すると背表紙の頸骨けいこつを折ってしまう。両手でそつと取り出して彼女に捧ささげた。

マリーは葉しおりのページを見開きにして俺にさし出した——新来の客は必ずこの洗札を受けるのだらう。

「これが我が栄光のカツパ・オミクロン・ファイ女子友愛会のメンバーよ」
「オズボーンさん、ことさらに指して教えていただくには及びませんよ。
ちつともお変わりになっていませんからすぐ分かりました」

「G a h a h a h a h a h a h a h a h a !」

マリーはしばらく英語で笑っていた。

俺の下手な英語でこれだけ笑って貰えば望外の望ぼうがいというものだ。

十五名から成なるそのカツパ・オミクロン・ファイ、ぞして隣のページに
載のっているカツパ・アルファ・ミュー、見開き合わせて三十五人の男女
友愛会員のうち黒人は彼女だけだった——目の前の百貫満代ひゃつかんみつよさんと同一人
物だとは誰も信じないほどの骨皮筋子ほねかわすじこさん……

指導教授グレイス・エルサーは剝くりの深いU字型の襟えりだが女子の胸元は
すべて慎つつしみ深く、僅わずかにV字型に切れ込んでいるだけだ——娘たちが乳房おっぱい
を見せびらかさない時代。

カッパ・オミクロン・ファイはマリーを加入させるくらいだから進歩的だつたに違いない。その証拠にマリーも含めて全員、ドレスの襟はインディアンでんとうてきもんようの伝統的文様の刺繡ししゅうで縁取ふちどられている。ピクニックがてら連れだつてインディアンしゅうらくの集落を訪ね歩いたのだろう。米国の差別主義者は黒人の好きなスイカ、フライドチキンまで嫌う。当然、インディアン憎けりや刺繡ししゅうまで憎いに決まつてる。

前列は新婦すわ坐りに、後列はモデル立ち。一同、こちらを向いて口には出さねど

「見てちようだい、漲みなぎる知性、輝かがやく美貌びぼう」

婉然えんぜんと微笑ほほえむ古き良きアメリカ合衆国才媛さいえんたちの艶姿あで。

スカートたけの丈が膝上ひざうえに移行する前の時代だ。ドレスの上半分は織おりの粗あらい生地きじでテーラードスーツ風仕立てながら、腰から下はゆつたりと優雅ゆうがな円錐形えんすいけいを描きながら膝下ひざしたまで広がっている。

——みなさん卒業写真用に奮発ふんぱつしたのだろう……
おそらくスカートの内部に忍ばせたタフタ織おりの釣り鐘べ型チ型コ下着トでボ
リユームを出している……

「今じゃ二万五千人の学生が居るって話だけどあたしの頃にはその半分は
居たかね。それでもあんだ、一万人の男女学生のうち黒人はあたし一人だっ
たんだからね」

ならば来る客、来る客にアルバムを広げて見せて自慢するのもムリは無
い。

そのエリート中のエリート黒人が卒業して就職、勤め上げた挙げ句あげくの最
終的地位が図書館館長なのだろうか。

「ちよつと貸して」

マリーはアルバムを取り返して捲めくり、再度見開さいどきにして私に渡した。

今回も指して教えて貰う必要は無かった。

角帽を被りマントを羽織った楕円形の写真がズラリと並ぶ中、東洋系の学生はただ一人。

「ミスター・テンガン。『どこで見かけなかったのか?』と訊くべきだったね」

ギヤグで返す余裕は無かった。

H a r u k o N i s h i n j o

——ニシンジヨウ・ハルコ……

俺名義の貯金通帳に挟まれていた新聞の切り抜きで見た女。

膝が笑いそうになる。

その写真から目を離せず、数歩、蟹歩きで移動して腰掛けた——便秘が

解消する直前のような脱力感がみぞおちから下腹部へ広がって行く。

「お母様が大学に通っていたのは確かに意外かも知れませんが、コウキ、会話はアジアで一番下手ですが日本人の学力の高さは鳴り響いていきますよ。英語にさえ慣れれば大学ぐらいは受かりますよ。あなたの養母は施設の責任者になれるぐらいだから学歴は高かったですよね？ ならば子供を引き取るほどの深いつきあいをしていた親友も当然、同じように優秀だったはずですよ」

とキヤロルは言った。

「いや……」

養母の書いた書類の誤字を訂正するのは子供の頃から俺の仕事だった。なぜ教養の無い養母が孤児院の長になれたのか不思議だったが、敗

戦直後の沖縄の風俗を知って合点がいった。あの頃、気の利いた女たちは鬼畜米英きちくべいえいから民主主義への世変わりについて行けない沖縄の男たちを見限みかぎって米兵に乗り換えた。

彼女たちは貞操ていそうの堅い沖縄女たちが落下傘パラシュートでスカートを仕立てている時に、メーシー百貨店デパートで売っているような赤や黄色のワンピースを着てとんがりサングラスを掛けてオープンカーの助手席ちんざに鎮座していた。

特定の米兵と暮らしている女は「ハーニー」と呼ばれた。米兵がやたらとその現地妻に「おまえハニー」と呼びかけるからだ。民間人、米兵、正式な婚姻こんいんかどうか、を問わず付き合っている相手が眼の青いアメリカ男であれば、その沖縄女は当然「ハーニー」と呼ばれた。

彼女たちの序列じょれつは選ぶ米兵で決まった。中でも将校クラスと正式に結婚した女は宝籬くじの一等を引き当てたようなもので夢見心地ゆめみごちで本国ステイツへ旅立っていった。他方、米兵相手の商売女はパンパンと蔑あひげすまれ、その中でも黒人相

手の女は最下級だった。

養母は若い頃、素人ではなかっただろう——あまり見せたがらない彼女のアルバムを俺は何度か盗み見していたので確信があった。すべて異なる米兵とのツーショットで沖繩男と並んだ写真はただの一枚も無かった。

一度、小遣い欲しさ養母のへそくりを漁あさってゴムバンドを巻き付けた猥褻写真わいせつの束を見つけた。あまりに枚数が多いので商売用だな、と直感したものだ。

当時はちよつとした不良なら猥褻写真わいせつの一枚は持っていた。互い貸し借りしていたから裸の男女の姿態したいに衝撃しやうげきはなかったが今でも目に浮かぶ構図こうずの写真が四枚あった。

一枚目。米兵四人が丸いポーカーテーブルを囲んでそれぞれに手札トランプを持ち、こちらを向いて笑っている。

二枚目。そのテーブルの下にショートヘアでかなり身なりの良い女が座

り込んで微笑んでいる。誰だか分からない。この頃のハーニーやパンパンはいちよう一様に厚化粧なので、よほど近しい人以外はしきべつ識別できないだろう。

三枚目。女の横顔が一人のプレーヤーの下半身におお覆い被かぶさっている。写真を見ている者が小学校高学年以上なら、彼女が何をしているか、分かるように撮とっている。

四枚目。目を閉じた女の横顔が大写しになっていて、アーンと広げた彼女の唇と米兵のズボンの前立まえたてとの間に白い肌の一部が見える。小学校低学年でも——たぶん——女が何をしているか想像できるように撮とっている。

商売用のわいせつ猥褻写真というのはかんれい慣例として男の顔を写さないものだが、この場合、最初の三枚があればポーカー仲間四人のうち誰が主演男優なのか特定できる。よってこれは敗者に対する気軽な罰ゲームのスナップだろう——一等賞品かも知れないが。

二枚目の写真で微笑ほほえんでいる女も「厚化粧メシしているから面は割れないだろう」という安心感ではなく「勝手に戦争いくさ始めて惨めに負けて安泡盛しまし飲んで軍歌唄うたっては泣いてる沖繩男シマーなんか私わたしの身元を知られても関係無いさあ。そいつが私を十九の春に戻してくれるわけでもないし」という開き直りに見えた。

とにかく恥じている様子は微塵みじんも無い。

要するに勝っても負けても男なら——女にも——損は無ない勝負、ただの座興お遊びだ。

さすがは新生・男女同権オケナワ沖繩。

それに、いくら戦後とはいえ養母は普段から公務員とは思えない服装をしていた。派手な諸肌脱サシドぎの服や肌着を好み、ダンスに行く時は真っ赤な口紅くちびるを塗りたくり……なにより無学だった。漢字が書けないというだけではなく、方言を常用していた者の常で、アクセントはもとより標準語共通語の発

音まで心もとなかった。

話せば「そうでしょう？」が「そーでそー？」「くだから」が「くらから」、書けば「わたしは」が「わたしわ」になるのだ。

いつものように酔って帰った時に口を滑^{すべ}らせたことがある。

「えー、あんた、あんたのおつかあはね、あんたをすててエライアメリカ将校^{しょうこう}さんとメキシコ行ったんだよ。あたしは行く度胸^{どきょう}無かったさ。いくさのすぐ後からあたしは小遣い稼^{かせ}ぎにあっちこっちの混血^{あいのこ}児を預かっていたから孤児院しなさいって、その将校さんに院長になされて家^{もち}まで貰^{もら}わされて米^{ライス}の飯さあ」

米軍の司令官クラスなら琉球政府が管理している施設の身分証明書や沖縄^{グック}土民に発行するパスポートといった公的書類さえ、どうにでもできる時代だったようだ。

とにかく、養母の友達に上品な女は居なかった。集まって賭^{おいちよかぶ}け事を始め

たら外国煙草は唾^{くわ}えるし膝^{ひざ}を立てて真つ赤な下着や真つ黒な月経帯^{生理バンド}を覗^{のぞ}かせる。たまに口にする英語も文法発音がめちやくちやな売春婦^{パンゲリッシユ}英語だった。

「いや?」

「……キャロル。それほどのインテリ女性なら過去はともかく学位まで取つた暁^{あかつき}には沖繩に凱旋^{がいせん}するか、少なくとも子供を呼び寄せるはずですよね。ところがそのどちらでもなかった。ということは、母は子供も過去の人生も忌^{いま}まわしいものとして沖繩の島に封印して、まるつきり新しい人生を選んだのではないか。もし母と息子だと判明して、まだどこかで生きていたとしても私が捜し当てて名乗り出た場合、向こうは知らぬ存ぜぬで通そうとするかもしれない……そんな不安がいちどきに押し寄せてきて……」

たぶん俺は長年、この真実から無意識に目を逸^そらせてきたんだろう。

「でもコウキ、そうなると毎年、あなたの誕生日に大金を送り続けた事実

と相反あいはんしますよ。あなたがおしゃつてた、最後の金額の大きさに至いたっては説明がつきません。あなたはお母様にとって特別な存在だったことは間違まちがいありません」

そうだろうか？

貯金通帳に振り込まれた最後の大金については俺俺なりの仮説かがだんだん膨はくらみ始めていた——まるで天火オーブンの中のパン種こうのように……

「……たとえばですよ、コウキ、その大金もあなたの進学を知つての学資だったとか」

さあ、どうだろう……祝い金ではなく、俺の留学が決まって出発までの間に、実母が養母に大金を振り込まざるを得ないような要求があつたのではないか？

「そうだと嬉しいうれいんですがね、キャロル……」

あの頃は航空便エアメールでも往復に数週間かかる。国際電話でもない限り合格発表から振り込み当日までの間に送金し終えるのは難しい。

——そもそも毎年の金は決まって東京から振り込まれていた。東京の郵便貯金口座から沖縄の郵便局の俺の口座に誰かが送金していたことになる……晴子はかなり以前に帰国して東京に住んでいたのだろう。そして幸せな家庭、かどうかは知らないがとにかく年々、俺の口座に大金を振り込めるような、人も羨むうらや暮らしだった。そこへ俺の養母から大学進学が決まったと連絡が入る。お祝いに実母は当時の十八万円、今だと少なくとも百万円を超える日本円をドルに両替して沖縄に送金した……その五百ドルがある段ボール箱の貯金通帳に振り込まれた最後の数字だ……

その時、「ある恐怖」が頸神経叢けいしんけいそうから飛び出して胸郭きょうかく、腰椎ようついを駆け抜け、仙骨せんこつから尾骨びこつに達して放電スパークした。

——進学祝い金なものか！ 殺しの動機だ！

「ミスター・テンガン。あんたは実の母親の名前さえ知らなかったの？」
こういう時は「そうです」なんだよな、とボンヤリ思いながら俺は首を横に振った。

「あたしもハルコも非白人カロードということまでキャンパス内の学食キヤフエテリアではよく向かい合って食べたもんさ。下宿もルート66ダイナー周辺で近くだったし。けどハルコを囲っていた白人将校しろんぼさんが黒人嫌いでね。そいつと一緒に時は目配せしてすれ違ったね。あたしの方も日本人ジャップと仲良くするといいい顔をしていない仲間はゴマンと居たし……その程度の仲だけど卒業後、一度、トーキョーからクリスマスのカードを送って来た。『日本政府の法務省・対在日米軍渉外課しよつがいかに就職できました』って」

——将校さんのコネを使ったんだろうな……

もっぱら在日米軍と情報の遣り取りをする役所の中には米国留学帰りで

なければ係長にもなれず、米軍の心証が良くなければ課長以上にはなれない職場もある。

体の良いCIAの下請け調査機関みたいなもので、そこなら女性でも数年で役職に就けるだろう。いや、結婚こそできなかつたが米軍高級将校を籠絡ろうらくした晴子なら次官ぐらいにはなれるだろう。

「オズボーンさん。よく思い出してくださいました。今の情報だけで飛行機賃の価値があります」

しかも貧乏ユコノミ人席ではなくファーストクラスの価値と言える。

1958年当時、日本本土の法務省に就職できた女性は数えるほどだろう。そして役人や官僚かんりしやうは異常なほど同期の桜、先輩、後輩、派閥はばつにこだわらる。必ず国家公務員職の名簿は残っている。もしデータ化されてるならすぐにも検索けんさくできるはずだ。

「そりゃ良かった。あんたは悪人には見えないからどうにか思い出した。

間に合って良かったね……あたしは見ての通りの糖尿病。それもサンデイ
エゴ大学医学部の教科書に使えそうな典型的症例さ。長くはないだろうよ」
「お察しします」

マリーは肩をすくめた。

「病気との折り合いは付いてるよ」

「オズボーンさん、この顔写真を撮らせてください」

マリー得意の凝視^{ぎようし}。

「……」

——断る理由もないはずだが……

マリーは一転、黒人得意の白目を剥く^む表情の後、口を開いた。

「You can't take it with you」

未だにリスニングは苦手だ。早口だったので聴き取れなかったが多分「大
事なアルバムを持ち出すな」という意味だろう。

俺は背広の隠しから携帯電話を取り出し、その電話機でアルバムを指した。

「持ち出さずにこの場で済ませますから」

「またもやマリリー得意のギョロ眼。」

「——マリリー、今度は何だよ？」

「ミスター・テンガン、あんたはテレビで『科学捜査班』見たこと無いの？」

俺はかけても無いサングラスをゆっくり外して、ウエル・アイ・ゲェス・ウィー・ファウンド・アウワ・マンさーてと。どくやらホシを押さえたよくだな、と主人公の真似をしてやりたかったが俺の日本人式発音ではウケそうもないので止めた。

「サンディエゴに来てからは忙しくて」

「髪の毛一本でDNA鑑定かんていの時代だよ。あんたの話を聞いていると、どうも、親子関係の証明なんかより、1958年に、ハルコが、ニューメキシコ大学を卒業している、という物的証拠の方が必要になりそうだね」

「……オズボーンさん、あなたが一万人に一人のエリートである所以ゆえんが分かりましたよ」

マリーは人差し指を立ててメトロノームのように振った。俺は即座に訂正した。

「……もとい、二万五千人に一人の、です」

「で、二万五千人に一人のこのあたしの写真が海を越えて日本に伝わったと思うと面白おもしろえじゃないか」

なんと！ 歴史的なエリートだったという証拠品、本人の棺に納めるべきアルバムを、この日本人ジャップちゃんにゆうしやく闖入者に呉れてやるというのだ。

「オズボーンさん、日本語で『なんとお礼を言って良いか』と言いますが本当に英語で何と言えよいか分かりません」

「アアー！」

マリーは手を振って俺を制した。

「あたしや、もう、社交辞令や臭い決まり文句を遣り取りする時間が無いんだよ。あんたがどうしても礼を言いたいというんならこの黒んぼ婆さんを抱擁してさっさと行っちゃいな」

ダンスクラブで誰も誘いに行かないほど肥っている女に義勇兵として志願した事はある。情けは人の為ならず、だ。

俺はその時分——今でも同世代では——大柄な方だ。

その俺が両手を伸ばして左右の指先が届かない女にすがったのは生まれて初めてだ。

第三章 動機

前方の空に航空機が浮かんでいる——空港は遠くない。

「コウキ、一つ、あなたのお母様のことで一つ疑問があります」

「どうぞ」

「あなたのお母様の姓『ニシンジヨウ』というのはオキナワ特有の姓ですよ。ヒデヨの知り合いにも同じ姓が居ました。三歳のあなた。アケミという名。生まれ故郷オキナワ。すべてを棄^すてて新天地・ニューメキシコ的女子大生ハルコに生まれ変わったなら、どうしてオキナワ出身と看板^{かんばん}を出しているような姓を選んだのでしょうか？」

石部^{いしべ}金吉^{きんきち}・ヒデヨ。安^Rら^Iか^Iに眠^Pれ——こういう女を妻にしたら浮気なんか帰宅と同時に見破^ふられていただろう。

「私もそこが腑^ふに落ちなくてね。良い方に考えれば……心の奥底に故郷・沖繩との繋^{つな}がりを残しておきたかったのかも知れませんか」

「悪い方であれば？」

「いくら混乱期の沖繩でも実在しない姓名や出自^{しゅつじ}を作り出すのは面倒^{めんどう}です。彼女を連れて引き揚^あげる米軍将校は身分証明が比較的容易^{ようい}な沖繩の姓を

借用しやくようしたんじゃないですかね。手近なところでアケミの母方ははかたの旧姓きゆうせいを使うとか。帰ったら調べてみるつもりです」

——いやむしろ晴子が本名で、アケミが源氏名げんじなだったのだろう……

晴子は女子師範しはん学校を出たインテリ女だったが——俺の仮説だ——俺のようなコブつきでは米軍高級将校めいが娶めとるはずもないから子持ちであることを隠して婚約し、渡米した。

その際、養母と取り決めがなされた。養母が俺を引き取り、過去にも未来にも晴子に子供は無かったことにする。その代わり晴子の夫となる米軍高級将校の権力で養母の私設孤児院を琉球政府末端組織まつたんそしきに昇格させ、養母は隣接した住宅を手に入れる。

この約束は数年間は守られた——養母が死ぬまで守られたかも知れない。というのは善人ではない養母が金を要求しようにもルート66ダイ

ナーを背景に撮った写真を送ったきり晴子の消息は途絶えていたのだから。

ある日、地元の新間に「本土で活躍している沖縄出身者特集」として法務省对在日米軍渉外副次官・西武門晴子の顔写真が出た。

昔の仲間たちは誰一人気づかなかったが養母は晴子の素顔をよく知っていた。一見して昔のアケミだと見分け、新聞社、役所を通じて晴子の住所を調べ上げて手紙を書く。

「とつてもえらくなつたつてね。おめでとう。あなたは女学校を出てるからしようこうさんにつれて行かれていいおもいおもしろい、やまとでもでもだいせいこうしてらる。だけどあんたと同じようにあたしもうちなーんちゅとアメリカ兵が中良くなるために、ポーカーテーブルの下でアゴはずれるほどがんばったじゃないか。少しぐらい幸喜とあたしにお金くれてもバチはあたらなはずよ」

晴子は天願幸喜名義の貯金通帳を作りその口座に振り込むことで手を打つ。

この振り込みは長く続いた——養母が死ぬまで続いたかも知れない。養母は善人ではなかったが金の卵を産む鶯鳥は殺さない。一生甘い汁が吸えるのだから。

そして俺が留学生試験に受かる。

「よかったさあ。幸喜も国費ひ生費になつてやま本との大学に行くよ。あたしもそろそろまとまった金をもらつて引退たいしたいさ。ここまでりっぱにそだてて国費ひ生になしたんだから千ドルくらいわはおいおいにおくつてね。もし千ドルおくらないと幸喜に今までのことをおしえて千ドルもらいに行かせるかも知れないよ。幸喜のべんきょうのじゃ邪ま魔なるんじゃないかね」

晴子は脅おどしに負けて払い込んだ。

だが、強請ゆすりは養母が死ぬまで続く。

駱駝らくだの背中に藁わらを積つむ。いつもの二倍の重さに増やす。問題無い。三倍にする。大丈夫だ。試しに一本載のせる……さらに一本……また一本……最後の藁わら一本を置いたとたんに「ボキッ！」駱駝らくだの背骨が折れる。

法務畑ばたの官僚かんりようなら配下には暴力団とかかわりのある法曹ほうそう関係者がいくらでも居る。秘書・悪徳弁護士・暴力団組長……何人か間に人を挟んで依頼主いらいぬしを伏ふせたまま刺客しかくを沖繩に送り込む。殺し屋は「残りの金を持ってきた」と、あの高級売春宿に養母を呼び出す……

「コウキ。一回り多く豚正の頭月を迎いたえた者として一言よろしいですか？」
 「謹聴きんちやうします」

——豚ウワの頭ワは夫・ヒデヨが沖繩方言を直訳したのを憶えたんだろう……

「わたくしの場合、何かやって失敗した後悔よりもやれば良かったという悔いの方が多ございますね」

「有り難きお言葉、痛み入ります」

畢竟、私に母は居なかった。

ただ、もう八十代半ばに達しているであろう西武門晴子の横顔だけは遠くから見る。

もし墓の中ならば必ず卒塔婆の俗名を確認する。

遠目に見るだけなら誰の害にも、養母のような最期にもなるまい。確かめるだけ、ただ確かめるだけだ……

ロサンゼルス空港の建物が見えてきた。

「素早く降りて下さいね。9・11以降はおまわりさんが多くて」

前方のトム・ブラッドレー国際線ターミナル正面玄関に旅行鞆の

護送船団^{コンボイ}と中国人らしき団体が吸い込まれて行く。

歩道に降り立った俺は運転席を覗き込み、「では、また」と言いかけて
思い止まった^{とど}。——たかが5号線^{カーブール}の道連れじゃないか……

再会を口約束したところで老少不定、お互いこの歳だ、再び相見^{あいまみ}ゆるこ
とは無いだろう。

「キャロル、サンディエゴまでの道中、お気を付けて」

キャロルはうなずき、手を添^そえていたサイドブレーキを下ろしながら笑
顔を返した。

「コウキ。良い^{グツディ}一日^{アンド}を、そして^{グツドラック}幸運を」

参考文献

1 「日本女をテーブルの下に入れておいてポーカーに興じる米軍将校たち」は以下を参考にした。

(了)

Tokyo Underworld: The Fast Times and Hard Life of an American Gangster in Japan

2 「ナバホ族と沖縄人の優越感」は以下を参考にした。
エッセイズ ゴールデンゲイト
新崎康善氏による文章
ガリオア・フルブライト沖縄同窓会編
ひるぎ社